

# 文化芸術交流

Arts and Cultural Exchange

美術、音楽、演劇、文学、映画などの芸術から、食、ファッション等の生活文化にいたるまで、日本の文化芸術を紹介し、文化芸術分野のグローバルな交流をプロデュースし、ネットワークづくりを支援しています。

# 文化芸術交流

Arts and Cultural Exchange

## 日本の文化芸術を世界に広める

海外の人びとが日本の文化芸術に触れることで、日本人が育んできた意識や価値観を理解し、感じる機会を創出する事業を展開しています。そのために、造形美術、舞台芸術、映像・文芸、生活文化という4つの領域において、古典作品や伝統芸能、ポップカルチャーやサブカルチャー、現代演劇や現代美術等の展示、公演、出版、映画上映などを行っています。日本の文化を多方面に発信することで、芸術による国際交流の輪を広げています。

## 情報提供・ネットワーク

芸術や文化を通じた国際交流を効果的に進めるためには、互いの国の文化芸術に関する情報や、担い手同士のネットワークが不可欠です。国際交流基金は、舞台芸術、文学、映画などの分野において、日本の最新情報を収集し、ウェブサイトやニュースレターとして海外へ発信しています。また、芸術分野における国際展や見本市など、人や情報が集まる場を創出したり、それらの活動への支援を行っています。

### 造形美術

国内外の美術館・博物館などの協力を得て、日本の美術・文化を海外に紹介する大型展覧会や、現代美術、写真、工芸、建築、デザイン、日本人形などのコンパクトな巡回展を世界中で実施しています。国単位での参加が求められる「ヴェネチア・ビエンナーレ」などの国際展での日本代表作家作品の展示、海外で実施される日本美術の展覧会への助成、作家や美術関係者等の人物交流事業など、交流の推進と情報発信に取り組んでいます。

### 舞台芸術

歌舞伎、文楽、能・狂言、日本舞踊といった古典芸能から邦楽や民謡、またジャズ、クラシック、現代舞踊、現代演劇など、さまざまな日本の舞台芸術を紹介するとともに、国際共同制作も手がけています。また海外公演を行う団体・アーティストへの支援・助成、日本の舞台芸術情報ウェブサイト「Performing Arts Network Japan」の運営や、「国際舞台芸術ミーティングin横浜」の開催などの情報発信・人物交流に取り組んでいます。

### 生活文化

茶道、生け花、武道、食、大道芸など日本人が生活のなかで生み出した文化を、講演やデモンストレーション、ワークショップの形で海外の人びとに紹介し、体験してもらう機会をつくっています。その他、日本の文化を支える優れた知識や技術をもった専門家を海外へ派遣し、文化財保存・修復、スポーツや音楽の実技指導を行うなど、その国の文化振興に貢献しています。

### 映像・文芸

日本のテレビ番組の海外放映、海外で制作される日本に関するテレビ番組・映画への助成、日本映画祭の開催、国際映画祭における日本映画上映へのサポートなど、映像を通じた日本理解の機会をつくります。また、海外の出版社や翻訳者に向けて日本の書籍を紹介する季刊誌『Japanese Book News』を刊行。翻訳・出版への助成や、海外での図書展への参加などを通して、日本文学が海外に広まるための土壌づくりを行っています。

### 日中交流センター

日本と中国の次代を担う若い世代の交流を促進するため2006年に設立。中国の高校生を約11カ月間日本に招へいし、日本人と同じ学校・家庭生活を送る「中国高校生長期招へい事業」、中国国内で日本の雑誌、漫画、音楽などの最新情報を紹介する「ふれあいの場」、日中両国の若者がブログや掲示板などを通じて参加・交流することのできる「心連心ウェブサイト」の3つの事業を実施しています。





1



2



3



4



5



6



7



9



8

1.「茂山狂言ブラジル公演」に際し、サンパウロ大学演劇学科で行われたワークショップ[ブラジル・サンパウロ]／2.韓国で開催した「われわれ！日韓映画祭」に駆けつけた崔洋一監督[韓国・ソウル]／3.「メキシコ・中米歌舞伎舞踊公演 歌舞伎—400年の伝統との出会い」での舞台「石橋」[メキシコ]／4.中国、イタリア、ハンガリー、オーストラリアなどを巡回した「キャラクター大国、ニッポン」展[ハンガリー・ブダペスト]／5.クウェート、レバノン、パレスチナより4名のキュレーターを招へいた中東学芸員招へいプログラムの際に行われた、学芸員によるプレゼンテーション／6.「2010年トルコにおける日本年」を記念して実施された「日本・トルコ共同制作現代音楽公演 Sound Migration」の出演者達[トルコ、エジプト、ハンガリー]／7.文化人招へいプログラムにより来日した、ヴァリハ奏者・研究家のザンバ(ジャン・パティスト・アンジアナリマナ)氏／8.パリ日本文化会館で開催された、郷土料理や日本の菓子を紹介する「郷土料理セミナー」シリーズの「金沢—加賀料理」[フランス・パリ]／9.「近代日本工芸 1900-1930 — 伝統と変革のはざまに “Les arts decoratifs japonais face à la modernité 1900-1930”」展会場[フランス・パリ] 撮影：C.-O.Meylan

## 日本の美術・文化への理解を深める 催しを海外で開催

### ■新次元 マンガ表現の現在

2000年代以降に話題になった日本マンガ9作品に焦点をあて、マンガ独自の表現の現在を紹介する展覧会を開催しました。戦後日本のストーリーマンガは独自の世界に到達し、いまなお発展を続けています。美術館で行われるマンガ展として、ただ原画を展示するに留まらない新たな展示を探る視点をもった本展は、キュレーターに高橋瑞木氏、空間構成に豊嶋秀樹氏を迎え、それぞれの作品世界を空間の中で立体的に展開することを試みました。

2010年度は水戸芸術館と韓国・ソウルのアートソングェセンターで開催。タイムラグなく日本マンガが翻訳・受容されている韓国では日韓のマンガ事情を反映したシンポジウムも併せて実施し、これまでにない展覧会として美術雑誌に特集が組まれました。現代の日本文化を代表するソフトパワーとして注目を集めるマンガやアニメですが、アジア各国での受容はそれぞれ異なっており、2011年度の巡回先であるハノイやマニラではまた異なる反響が期待されます。[水戸芸術館現代美術ギャラリー、2010年8月14日～9月26日、アートソングェセンター(ソウル)、2010年12月4日～2011年2月13日]

### ■近代日本工芸1900-1930—伝統と変革のはざまに

パリ日本文化会館において、1900年から1930年の間に制作された陶芸、染織、漆工を中心とした近代日本の工芸品約70点を紹介する展覧会を行いました。当時のパリは、アール・ヌーヴォー、アール・デコという近代芸術運動の絶頂期にあり、世界中の芸術家を惹きつけていましたが、同時期に日本でつくられたこれらの作品は西洋のモダニズ

ムの影響を受けた意匠と、友禅、漆、七宝等の日本伝統の技を巧みに組み合わせ、発展させたものです。オープニングにミッテラン文化・通信大臣の公式訪問のほか、会場には多数の来場者が集まりました。展覧会に伴い、京都国立近代美術館とパリ日本文化会館の共催による国際シンポジウム「東西文化の磁場」も開催され、熱心に聞き入る観客の間に、新たな日仏文化交流の対話の場が生まれました。

[パリ日本文化会館(フランス)、2010年10月13日～12月23日]

### ■学芸員交流

学芸員交流は、世界各国のキュレーターをグループで招へいし、日本各地の美術館やギャラリー、作家アトリエ等への視察を通して、日本の美術状況に対する理解と関心を深めてもらうとともに、日本人学芸員との交流の機会を提供し、将来にわたる連携の強化を促すものです。

2010年度は中東学芸員グループ(2011年2月7日～19日:クウェート、パレスチナ、レバノンより計4名)と米国学芸員グループ(2011年3月7日～19日:アメリカ各地より計11名)を招へいし、東京、金沢、京都、大阪、兵庫、岡山、高松等の各都市を訪ね、日本の美術関係者との間で情報交換の場がもたれました。

参加者からは、自国と日本の美術館のビジョンやシステムの違いを指摘する声や、日本人キュレーターとのネットワークが広がったこと、日本の文脈のなかで日本美術を実見することの重要性を再確認したこと、日本を近く感じるようになり、今後、日本美術の企画を進めていくにあたって自信をもてたことなど、多様な意見が寄せられました。



[上]「新次元 マンガ表現の現在」展の会場 撮影: Myoungrae Park  
[右]「近代日本工芸1900-1930」展ポスター



## 古典から前衛、クロスオーバーまで、 舞台上で交錯する日本と世界の文化

### ■南米音楽公演——TRANS-CRIOLLA

～響き合う地平の向こうへ～

2010から11年にかけて、アルゼンチン、ウルグアイ、チリは建国200周年を迎えました。さまざまな歴史のなかで人びとの心を支えてきた各国の音楽に敬意を表し、その国のアーティストとともに建国200周年を祝う公演として、南米音楽界期待の若手歌手である松田美緒氏、日本を代表するパーカッショニストのヤヒロトモヒロ氏、ウルグアイの巨匠ピアニストであるウーゴ・ファトルーソ氏のトリオが3カ国を巡演しました。フォルクローレ、タンゴ、カンドンベ、ヌエバ・カンシオンなど、各国で大切にされている音楽が3人の奏でる音と混ざり合い、会場が一体となって大いに盛り上がりました。

本公演をきっかけに、共演したカンドンベグループのレイ・タンボール(ウルグアイ)やチリの国民的人気歌手であるフランチェスカ・アンカロラ氏の初来日も実現、日本にもTRANS-CRIOLLAのサウンドが響き、南米公演がきっかけで結実した音楽の輪が広がりました。その後も、この公演で生まれた交流の種が日本と南米で芽を吹き、大小さまざまな形で育まれています。

[アウディトリオ・インマクラダ・コンセプション(ブエノスアイレス)、コルドバ大学物理・数学・自然科学学部大講堂(コルドバ)、マシオ劇場(ウルグアイ・サンホセ)、アウディトリオ・ネリ・ゴイティエリニョ(モンテビデオ)、バルパライソ大学文化センター(バルパライソ)、ペニャロレン区文化センター(サンティアゴ)、2010年8月6日～14日]

### ■メキシコ・中米歌舞伎舞踊公演——歌舞伎—400年の 伝統との出会い

「日本メキシコ交流400周年」を記念して、400年の歴史をもつ歌舞伎舞踊公演をメキシコと中米2カ国で巡回実施



[左]「南米音楽公演——TRANS-CRIOLLA」から  
[右]「舞踏ロシア・中国公演——舞踏・大いなる魂」から

しました。歌舞伎俳優の中村京蔵氏、中村又之助氏、市川喜之助氏をはじめ長唄・三味線・鳴物など総勢13人が出演し、歌舞伎につけられる音楽の意味、衣裳の着付け、化粧のしかたなどを実演で紹介するとともに、代表的な女形舞踊の「鶯娘」と、獅子が舞う「石橋(しゃっきょう)」を上演しました。海外公演の経験も豊富な京蔵氏、又之助氏による楽しい話と流麗かつ迫力のある舞に、各地で観客から惜しみない拍手が送られました。

[モンテレイ市立劇場、メキシコ市立劇場(メキシコ)、サンサルバドル国立劇場、サンタアナ国立劇場(エルサルバドル)、マヌエル・ボニージャ国立劇場(ホンジュラス)、2010年10月8日～21日]

### ■舞踏ロシア・中国公演——舞踏—大いなる魂

「舞踏」の創始者と言われ、ヨーロッパをはじめ世界各国で高い評価を受け、没後25年を迎える土方巽の舞踏世界を紹介する事業を、ロシアと中国で実施しました。山本萌氏率いる金沢舞踏館(ロシア公演)と、和栗由紀夫氏(中国公演)による公演を中心に、土方の舞台公演の記録など貴重な映像の上映と専門家によるレクチャー、世界的な写真家である細江英公氏が撮影した「鎌鼬」などの写真や公演ポスターの展示もあわせて行われました。ひとつのジャンルにとどまらず美術・映像・写真など同時代の前衛芸術をも巻き込み、西洋的な芸術表現に対するリアクションとして発展した土方の舞踏世界は、コンテンポラリーな芸術が注目されつつある両国において大きな衝撃を与えました。

[リツェディ劇場、シェミヤキン基金(サンクトペテルブルグ)、ドラマ芸術学院(モスクワ)、ユーレンス・センター・フォー・コンテンポラリー・アート(北京)、TNT劇場(北京)、ロシア公演2010年11月20日～28日、中国公演2011年2月26日～3月6日]



## アジア、ロシアなどで 日本の映像・文芸と親しむ機会を創出

### ■黒澤明生誕百周年記念 アジア巡回上映会を開催

日本が世界に誇る映画監督、黒澤明(1910-1998)の生誕百周年を祝い、韓国、フィリピン、インドネシア、タイ、マレーシアの5カ国8都市で、『羅生門』(1950)や『七人の侍』(1954)といった代表作を含む23作品を巡回上映しました。

最初の巡回先となったソウルの韓国映像資料院(KOFA)では、黒澤映画を語るには欠かせない存在である、スクリーンターの野上照代氏、俳優の仲代達矢氏をゲストに迎えました。韓国の国民的俳優であるアン・ソング氏をはじめ、韓国著名映画人も多数駆けつけ、華やかな幕開けとなりました。

これまでアジアの国々にて黒澤作品が紹介される機会は決して多くはありませんでしたが、今回の巡回上映において、5カ国合計約3万9千人の観客が、黒澤監督の世界を堪能しました。

[黒澤明生誕百周年記念 アジア巡回上映会(韓国、フィリピン、インドネシア、タイ、マレーシア)、2010年7月1日～2011年3月20日]

### ■ロシアはじめ多数の国際図書展に参加

2010年度は各国の大使館や出版文化国際交流会(PACE)と協力し、日本の書籍の情報を発信するため海外14カ国・14都市の国際図書展に参加しました。なかでも、ロシアの首都モスクワで開催された第12回モスクワnon/fiction国際知的図書展は19カ国から300団体が出展する大規模な図書展で、年々増加する入場者数は、2010年には約3万3千人に上りました。出版文化国際交流会と共同で出展した日本ブースには、書籍363冊、カタログ類1290部が展示され、約2000人が来場し、大変な賑わいでした。

この図書展にあわせ、作家の黒川創氏を派遣し、図書展

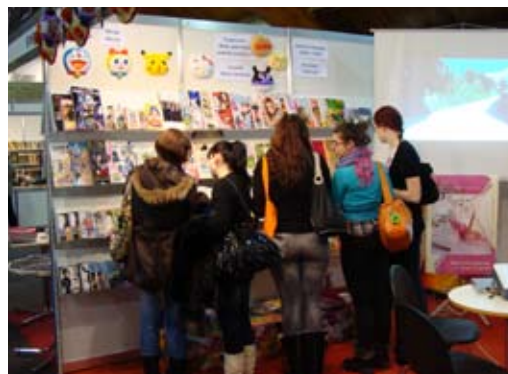
会場、モスクワ文化センター、サンクトペテルブルク大学にてそれぞれ対談、講演会、座談会を開催しました。300もの出展者が居並ぶなか、特定の国、それもアジアのある国のみに注目が集まることは非常に稀ですが、2009年に文化人招へいプログラムで来日した作家オリガ・スラヴニコワ氏と黒川創氏との対談は地元メディアの関心を強く引き、ロシア国立テレビのなかで文化ニュースの権威である番組「文化テレビ」で、日露の両作家の対談が取り上げられました。[ロシア、2010年12月1日～5日]

### ■『日本宗教史』の翻訳出版への助成

国際交流基金は各国の出版社や翻訳者に向けて日本の最新動向を伝えるため、英文ニューズレター『Japanese Book News』を発行し、新刊書の情報を提供しています。また年に1回申請を受け付けている一般公募プログラム「日本理解促進翻訳・出版助成プログラム」を通して、出版・翻訳経費の一部を助成しています。

こうした多様な面から実施している支援の成果として『日本宗教史』(末木文美士著)がベトナムの出版社(アルファ・ブックス)から2010年度に出版されました。これは、過去に『Japanese Book News No.49』で紹介し、その後、「推薦著作リスト」にも掲載することで、海外で出版されることを勧奨してきた宗教学の名著ですが、今般の出版助成を得て、ベトナムで出版されたものです。

また、『Japanese Book News No.57』(2008年秋号)で紹介した『食堂かたつむり』(小川糸著、ポプラ社)は、イタリア語に翻訳され、2011年夏、イタリア国内の文学賞「バンカレラ賞」の料理部門賞を受賞しました。



[左] 韓国で行われた黒澤明生誕百周年記念上映会ポスター  
[中] ラトビアで行われた図書展の日本ブース  
[右] 『日本宗教史』ベトナム語版

## ロボット技術、日本料理、史跡保存など 幅広い分野で市民が交流

### ■あざらし型セラピーロボット「パロ」、東南アジアへ

産業技術総合研究所の柴田崇徳主任研究員を東南アジア4カ国へ派遣し、同研究所が開発してきたあざらし型ロボット「パロ」を紹介するイベントを行いました。セラピーロボットとして福祉・医療現場で活用されているパロの役割に、多くの参加者が興味をもち、各会場とも講演後は、パロを囲む人だかりができていました。

[ベトナム、シンガポール、ブルネイ、パキスタン、2010年9月28日～10月9日]

### ■フランス、スイスで「金沢——加賀料理」を紹介

日本文化を紹介する事業のなかで、日本の食文化は常に高い関心を集める分野です。2010年度は、郷土料理をテーマに企画を公募し、フランスとスイスで、金沢の老舗料亭「つば菖」の川村浩司料理長らによる郷土料理セミナー「金沢——加賀料理」を行いました。金沢の歴史的背景や文化的背景を踏まえ、加賀料理を紹介し、これまで知られていなかった新しい日本食を紹介することができました。

[フランス、スイス、2011年2月27日～3月13日]

### ■山下泰裕氏、井上康生氏による柔道指導

2010年7月、日本を代表する柔道家山下泰裕氏と井上康生氏をイスラエル、パレスチナに派遣し、現地の柔道選手に対する指導を実施。少年少女を対象とした合同の柔道教室では子どもたちがたくさんの汗をともに流しました。その後、2010年12月にはNPO法人柔道教育ソリダリティーによって、イスラエル、パレスチナの少年選手達が福岡国際中学生柔道大会に来日。3カ国の未来の柔道選手をつなぐこの活動は、新聞などで大きく報道されました。

### ■サハリンにおける樺太時代の史跡保存事業

2008年と2009年に、北海道大学、ロシア・サハリン州

文化局などと共同で、老朽化が進む樺太時代の歴史的建築物等文化遺産の修復・保存を巡って、2回の国際シンポジウムを実施してきました。2010年には、建築設計、塗装、石材、瓦等各分野の日本人専門家グループを派遣して現地調査を実施。まとめられた報告書は、2011年6月にサハリン州文化省に手渡され、今後の保存・修復計画の指針として活用されることになりました。

[ユジノサハリンスク、2010年10月5日～10月9日]

### ■ドイツ語圏舞台芸術関係者(ドラマトゥルク)のグループ招へい

2011年1月に始まった日独交流150周年を記念して、ドイツ、オーストリア、スイスの若手・中堅ドラマトゥルク(劇場・フェスティバルの企画・キュレーション、舞台作品の芸術面の考証、企画構成に関わる役職)6名をグループで招へいしました。日本の舞台関係者やアーティストと交流した他、ドイツ演劇の最新事情に関するセミナー(共催:東京ドイツ文化センター)では、劇場の運営方針決定プロセスや、公的機関の文化活動に対する支援の考え方の違い等、熱い議論が交わされました。

[東京、那須、京都、2010年11月23日～12月7日]

### ■日韓プラストビート・プロジェクト

ソウルで集中的に日本を紹介した「日韓新時代」事業の一環として、日韓の大学生がひとつの「会社」を組織、自分たちでゼロから音楽イベントをプロデュースし、収益を社会貢献活動に寄付するという二国間社会教育プログラムを行いました。約3カ月間の協働の過程で、学生たちは二度の合宿やスカイプ会議を通して会社名、役職、会社理念、イベントコンセプト、寄付先について徹底的な議論を行い、時にはぶつかり合いながらもソウルと東京でライブ・イベントを成功させ、収益をNPOに寄付することができました。

[ソウル、東京、2010年11月～2011年2月]



[左] 郷土料理セミナー「金沢——加賀料理」

[中] 柔道指導を行う井上康生氏

[右] 「プラストビート・プロジェクト」で議論する日韓の大学生





## 日本での生活体験、ウェブサイトや中国の拠点など、多角度から日本理解の機会をつくる

### ■中国高校生長期招へい事業

日中交流センターでは、中国の高校生を11ヵ月間招へいし、日本の高校に通い、同世代のクラスメートやホストファミリーなど多くの日本人びとと交流するなかで、日本の社会や文化を、実感に基づいて理解してもらおう機会を提供しています。5年目を迎える2010年度には、7月に前年度から日本に滞在していた第四期生35名が帰国し、続いて9月に第五期生38名(男子10名、女子28名)が来日しました。高校生たちは、全国各地の高校で、部活動や学校行事、ホームステイ生活を経験することにより自立心や協調性を身につけ、また、受け入れ校やホストファミリーは、日中の未来の架け橋となる学生たちを包み込む大切な役割を担っていただきました。あるホストファミリーの方が「初めはコミュニケーションをとるのに困りましたが、徐々に内面まで話し合えるようになり嬉しく思いました」と話していたように、長期的に滞在することで生まれる深いつながりは、今後の日中の交流をより強固にしていくことでしょう。

### ■「心連心ウェブサイト」運営

日中交流センターが運営する「心連心ウェブサイト」(<http://www.chinacenter.jp/>)は、日中の最新情報を発信し、同時に、日中同時翻訳機能を使って日本語・中国語のどちらでも意見交換をすることができるブログ形式のコンテンツを備えています。これらは、国際交流基金のさまざまなプ

ログラムで来日・訪中する学生たちが事業終了後も交流を続ける場としての役割だけでなく、等身大の両国の若者の姿を紹介することで、未来の日中友好の礎を築くことをめざしています。このウェブサイトの対象は両国の若い世代ですが、より広い世代からの反響も大きく、「学生たちの目に実際の日本がどう映っているのか、その感想を見ることによって、日本の文化や特徴などを再認識することも多いです」といった声も寄せられています。

### ■「ふれあいの場」の設置・運営

「ふれあいの場」は、日本に関する情報が少ない中国の地方都市において、日中の文化が体験でき、日本の雑誌・書籍・CD・DVD等を通して現代日本文化に触れられる、若者を中心とした交流の場です。2009年までに、四川省成都市、吉林省長春市、江蘇省南京市、吉林省延辺市、青海省西寧市、江蘇省連雲港市、黒龍江省ハルビンの7ヵ所が開設され、2010年度はさらに重慶市、広東省広州市に新設されました。「ふれあいの場」ではさまざまな日中文化交流イベントを実施しています。2011年3月に行った学生交流事業では広州と南京の「ふれあいの場」で、日本の大学生が企画・参加する交流イベントを開催しました。また、「ふれあいの場」訪問事業では、日本の高校生が成都を訪れ、現地の学生らと交流しました。



[左] 第五期生来日歓迎レセプションにて  
[中] 「心連心ウェブサイト」内の留学生日記  
[右] 「広州ふれあいの場」で日本の餅つきを体験

